

名詞句の構造について¹

濱崎 孔一郎

(1992年10月15日 受理)

On the Structure of the Noun Phrase

Koitiro HAMASAKI

0. はじめに

節構造に関する研究は、多くの言語学者によって様々な角度から理論的になされてきたが、他方名詞句の内部構造については、Anderson (1979) が現れるまでは、包括的な研究はまったく無かったといえる。名詞句の研究に先鞭をつけたのは Chomsky (1970) であったが、その後約10年間この分野における進展は殆ど見られなかった。ところが、最近になって限定詞句仮説 (DP hypothesis) が登場して以降、節構造にだけでなく、名詞句構造にも機能範疇 (functional category) が存在するのではないかということが、言語理論にとってひとつの重要な話題になってきている。というのも、名詞句構造にも機能範疇が存在するということになれば、従来しばしば指摘されてきた名詞化 (nominalization) による節構造と名詞句構造の対応性が統一的に捕えられることになり、その結果 X^{bar}理論の一般性が高まり、言語理論の構築に大きな貢献をもたらすことになるからである。

そこで本稿では、限定詞句仮説の妥当性を検証することにより、これまで曖昧にしか捕えきれていなかった名詞句構造を明らかにすることを目的とする。その際、議論は以下のように展開される。まず、1節では、過去のこの分野における研究を概観しながら、その問題点を指摘する。2節では、限定詞句仮説を紹介しながら、その妥当性について検討し、同時に名詞句の内部構造を解明していく。3節は議論全体のまとめとなる。

1. 先行分析とその問題点

本節では、これまでの研究が名詞句構造をどのように見てきたかということをもまず検討する。そして、名詞句の内部構造がどのように仮定されてきたかということを中心にしながら、その問題点を明らかにしていく。

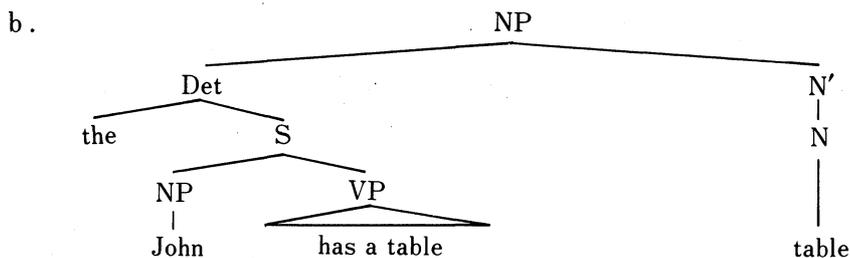
1.1. Chomsky (1970)

Chomsky (1970) は、いわゆる語彙論的仮説 (lexicalist hypothesis) の立場に立ち、変形論的仮説 (transformationalist hypothesis) を否定している。語彙論的仮説による名詞句構造を検討する前に、変形論的仮説による名詞句の内部構造をまず見ていく。例えば(1)のような例を考えてみよう。

(1) John's table (Chomsky (1970: 200))

(1)のような例が変形操作によって派生されるとすると、その基底構造は(2)のようになる。²

(2) a. the table [S John has a table]



ところが、(2)のような基底構造を仮定することに関して、Anderson (1983-84: 3) は以下のような問題点を指摘している。すなわち、第1に、主題役割 (thematic role) を付与することが出来る位十分に意味内容を持った形態素が、表層構造に至るまでに削除されてしまっているのかという点。第2に、動詞 have によって付与される主題役割はアポストロフィー s によって表示されているように思われるが、この意味論的に空の要素と削除された動詞 have との間には形式的な関連がないという点。第3に、Stockwell et al. (1973) が指摘しているように、動詞 have が必ずしも所有格名詞句 (possessive NP) で示されている意味を全て表わしているとは限らないという点である。この点に関しては、例えば、次のような例を考えてみよう。

(3) a. Robert's house is white

b. The house Robert has is white

(Anderson (1983-84: 4))

アポストロフィー s で表わされる意味が動詞 have によってのみ言い換え可能であるとすれば、(3a) は(3b)の持つ意味しか表わさないということになるはずである。ところが実際には、(3a)における Robert's house は Robert が、借りているとか、昔住んでいたとか、好きなものとして選んだとか、そこで働いているとかいう様々な解釈を許すのである。そして、(3b)はこれらの解釈を全て排除してしまう。以上のような理由で、変形論的仮説は支持することが出来ない。そこで Chomsky は、(1)のような構造は基底部門の諸規則で派生されるものと考え、(4a)のような動名詞的名詞化形 (gerundive nominal) や (4b) のような派生名詞化形 (derived nominal) も語彙変形 (lexical transformation) によって生成されるものとした。

(4) a. John's criticizing the book

b. John's criticism of the book

(Chomsky (1970: 187))

しかし、これらの名詞句の内部構造が具体的にどのようなになっているのかということに関する具体

的な記述は何もない。³

1.2. Chomsky (1981) および Anderson (1983-84)

最初に、所有格名詞句構造について、Chomsky (1981) ではどのように考えられているのを見よう。Chomsky は、格理論の議論において、他の様々な格付与の特性と共に、属格付与を(5)のように仮定している。

(5) [NP ___ X'] において NP は属格である。 (Chomsky (1981: 170))

まず、(5)における一番の問題点は、最大投射 (maximal projection) を NP としているにも関わらず、主要部 (head) を N とせず、X と指定している点である。最大投射と主要部の範疇が一致しないということになれば、Xバー理論の制約に抵触してしまうからである。主要部の範疇を N に限定せず、X と一般的な表記にしたのは、名詞句(6)のようなものばかりでなく、(7)のような動名詞構造が存在するためであると考えられる。

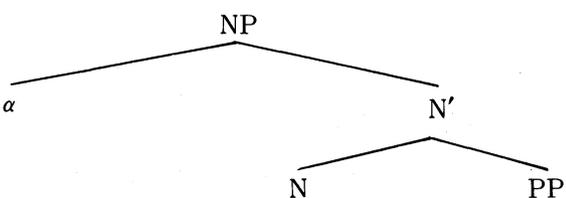
(6) [NP his book]

(7) [NP his reading book] (Chomsky (1981: 165))

すなわち、動名詞構造をどのように捕えるべきかがはっきりしていないために、(5)において、X というような一般的な表記にせざるをえなかったものと考えられる。

次に、所有格名詞句構造ばかりではなく、一般的な名詞句構造をどのように仮定しているのかということについて見ていく。Chomsky (1981) では、名詞句の一般的な構造がどのようになっているのかを明示していないが、次のような構造が記されている。⁴

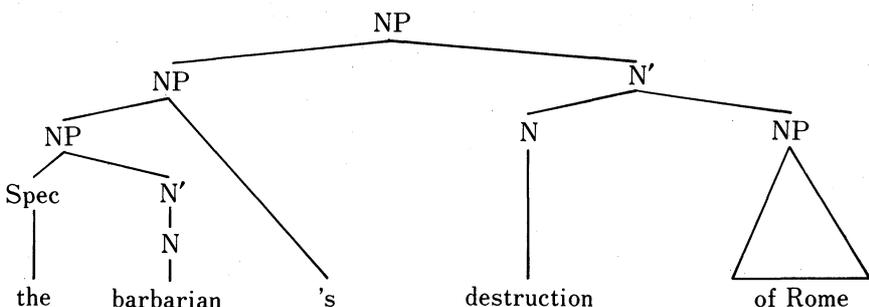
(8)



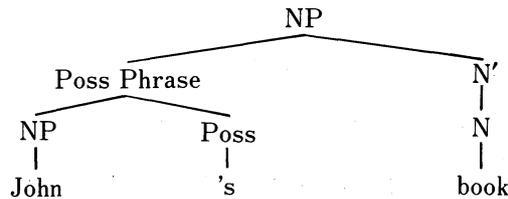
(Chomsky (1981: 154))

しかし、先に指摘したように、動名詞構造も(8)で表せるのかということと、所有格名詞句構造の場合に指定辞 (specifier) α 中の構造がどのようになっているのかということに関しては不明である。この点に関して、Anderson (1983-84) は、Chomsky の議論を受けて、次のような構造を仮定している。

(9) a.



b.



(Anderson (1983-84: 13))

まず、(9a)に関して3つの問題点が挙げられる。第1に、定冠詞 *the* の範疇が特定できていないという点。第2に、's の範疇が何か不明であるという点。第3に、一番上の NP の指定辞が NP となっているが、その内部構造はどうなっているのかが曖昧であるという点。言い換えると、主要部が何であり、どういう投射になっているのかがはっきりしないということ。以上の3点である。

次に、(9b)に関して同様のことが言える。Poss Phrase というのが一体どういう句範疇であり、その内部構造はどうなっているのかということが明確でないし、Poss と表示された要素が接辞であるのか、それとも別の何かであるのかが分らない。

1.3. Chomsky (1985)

Chomsky (1985) では、Chomsky (1981) の方針に沿って議論を発展させているが、所有格名詞句構造におけるアポストロフィー *s* を POSS と名付け、これが格の具現化されたものとして NP に接辞化 (affixed) されると考えている。⁵ そして、この POSS は、(10)のような環境のもとで挿入されるものと仮定されている。

(10) [NP NP ___]

(Chomsky (1985: 195))

この場合もまた、先に示したように、動名詞構造に関する問題は未解決のままであるし、また POSS という特殊な要素についてもいかなる範疇に属するのか不明で、何の一般性も認められない。さらに、名詞句全体の構造についても Chomsky (1981) と変わった点は見られない。

以上見てきたことから、名詞句構造に関する問題点をまとめてみよう。まず第1に、名詞句の主要部の範疇は何であり、いかなる投射になっているのかという点。第2に、名詞句の指定辞に生じるとされている所有格名詞句の構造はどのようにになっているのかという点。第3に、第2点に関連して、アポストロフィー *s* の定義特性および範疇は何かという点。第4に、名詞句の指定辞に生じる、冠詞その他の限定詞の範疇は何かという点。以上である。

2. 限定詞句仮説

本節では、最近生成文法家たちの中で研究が進んでいる限定詞句仮説を紹介しながら、各詞句の内部構造を検討していく。

2.1. 拡大Xバー理論

限定詞句仮説といっても学者によって様々な考え方があるが、初めは、語彙範疇 (lexical category) と機能範疇 (functional category) (すなわち、非語彙範疇) との相違に注目することから研究は始まった。代表的な研究としては、Abney (1986), Fukui (1986), Fukui and Speas (1985), Stowell (1989), Giorgi and Longobardi (1991) 等がある。語彙範疇は $[\pm N, \pm V]$ という素性により次の4つに分けられている。

- (1) a. 名詞 $[+N, -V]$
- b. 動詞 $[-N, +V]$
- c. 形容詞 $[+N, -V]$
- d. 前置詞 $[-N, +V]$

これらの語彙範疇に関しては、範疇分けもはっきりしており、どういう構造を持っているかということについて研究も進んでいる。ところが、機能範疇に関しては、いかなる類を成して、どのような構造を成しているのかといったようなことが曖昧であった。限定詞句仮説の提唱者は3つの機能範疇を想定している。すなわち、COMP, INFL, DET である。

ところで、Chomsky (1986) は、まずXバーの式型 (schema) を(12)のように表示している。

- (12) a. $X' = X X''^*$
- b. $X'' = X''' X'$ (Chomsky (1986: 3))

さらに、Chomsky は、Xバー理論を語彙範疇から非語彙範疇 (C=Complementizer, I=Infl) まで拡大して、(12)の式型から従来それぞれ S, S' として示されていた文構造を(13)のように捕え直している。

- (13) a. $S = I'' = IP = [NP [I' [VP V \dots]]]$
- b. $S' = C'' = CP = [\dots [C' C I'']]$ (Chomsky (1986: 3))

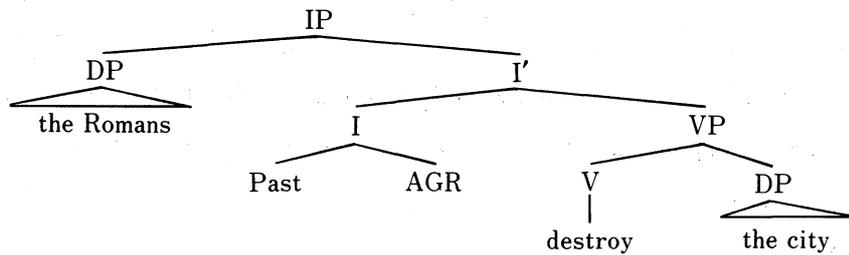
そして、代入 (substitution) の特性として、ゼロレベルの範疇は主要部の位置へ、最大投射は指定辞の位置へ移動するものと仮定している。⁶すると、文構造において、主要部である補文標識 (complementizer) などはCの位置へ、WH句などの最大投射はCPの指定辞の位置へというように、それぞれの生起する場所の違いが明白になった。従来の $S' = \text{COMP } S$ という構造では、ゼロレベルの範疇も最大投射も同一のCOMP節点に生じることになってしまい、明らかに拡大Xバー理論の方が正しい一般化であると言えよう。

2.2. 名詞句か限定詞句か？

文構造における機能範疇は(13)でうまく記述することが出来るが、限定詞句仮説はこれを名詞句構造における機能範疇Dにまでさらに一般化を上げようとするものである。実際、以前から指摘されてきた(14)のような文構造と(15)のような名詞句構造の類似性を明示的に示すことが出来るようになり、さらに、ともに主語が指定辞の位置に生じるという点でも一般性が高まることになるので、限定詞句仮説の有効性が証明されることは、理論的にも望ましいことである。

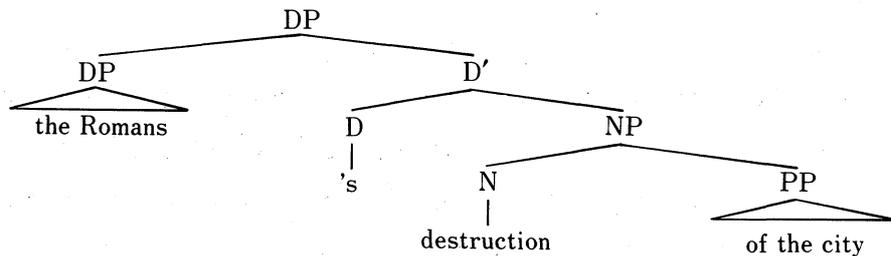
(14) a. the Romans destroyed the city

b.



(15) a. the Romans' destruction of the city

b.



従来の分析よりも限定詞句仮説が勝っている点として, Saito (1991) は, Abney (1987), Stowell (1989), Szabolcsi (1983-84) 等の議論を基に, 以下の4つを挙げている。

第1に, Chomsky (1986) の拡大Xバー理論を仮定すれば, (12b)に見られるように, 指定辞の位置にはX''という句範疇がこなければならない。限定詞句(DP)構造を仮定すれば, (15b)で言うと, 冠詞や指示詞などのゼロレベルの範疇はDの位置に, 所有格名詞句などの最大投射は指定辞の位置に, というように, 現れる位置に違いがあるので, 拡大Xバー理論の要求を満たしている。ところが, 従来のNPという分析では, ゼロレベルの範疇も句範疇も共にNPの指定辞の位置に生じることになってしまうのである。

第2に, Chomsky (1986) の拡大Xバー理論では, 機能範疇I, C共にXバー理論の要求を満たし, IはVPを, CはIPを補部としてとる。そして, IはIPの, CはCPの主要部となっている。従って, Dも主要部として機能し, 補部にNPをとれば, 全ての機能範疇が, Xバー理論の下に統一されることになる。

第3に, Szabolcsi (1983-84) の議論において, ハンガリー語の名詞句が限定詞句仮説を裏付ける証拠になっている。この論文は, ハンガリー語の名詞句はINFLを持っている点でSに類似しているということを主張しているが, その議論の中で次のような例が示されている。

(16) én-nek-em a vendeg-é-m

I-dat-lsg the guest-poss-lsg

'my guest'

(Szabolcsi (1983-84: 91))

まず, (16)の句は焦点(focus)の位置に生じていることから最大投射を形成していることが分る。ここで, 所有を示す与格(dative possessor)のén-nek-emはa(z)'the'と共に起できるという事実があ

る。このことは、限定詞句仮説を採用すれば、それぞれが指定辞の位置とDの位置に生じるものとして説明出来るが、従来のNPという分析ではうまくいかない。また、所有者と被所有者の名詞の間には人称・数の一致が見られ、ちょうど文構造のINFL内のAGRと同じように、名詞句の場合にもAGRが存在し、格を付与しているように思われるのである。つまり、名詞句の中にもAGRを含むような機能範疇が存在することになり、限定詞句仮説の裏付けとなっている。

第4に、次のような構造におけるPROの存在が限定詞句仮説を支持する証拠となる。⁷

(17) yesterday's D_{AGR} destruction of the ship [to collect the insurance] (Abney (1987: 101))

(17)のような構造では、理由を示す節におけるPROは動作主 (Agent) という θ 役割を付与された項 (argument) によってコントロールされなければならない。しかし、そのような項は明示されていないし、yesterday'sに動作主 θ 役割が付与されるというのも不自然である。従って、この名詞句内には、destructionの外的 θ 役割を付与されたPROが存在していて、これが理由を示す節のPROをコントロールしていなければならないということになる。しかし、NP構造では指定辞の位置が1つしかなく、これが既にyesterday'sによって占められているので説明出来ない。それに対して、DP構造ではDの補部のNPに指定辞が設定できるので説明が可能となる。

ここで、1節の終わりでまとめておいた名詞句構造に関する問題点を考えてみよう。第1, 第2, 第4の問題点に関しては、名詞句は実際にはNの投射ではなくて、限定詞Dを主要部とする限定詞句構造になっているのである。上に挙げた点から、従来の名詞句構造よりも、ゼロレベルの範疇の生起できるDと最大投射が生じることを許す指定辞とを併せ持った限定詞句構造の方が勝れているということが分る。第3の問題点に関しては、詳しい議論は浜崎 (1987) および濱崎 (近刊) に譲るが、アポストロフィー-sは範疇Dに属す。また、第1の問題点について補足すると、動名詞構文の場合も、限定詞句構造であれば、動名詞はDの補部に生じるので何の問題も起きない。⁸

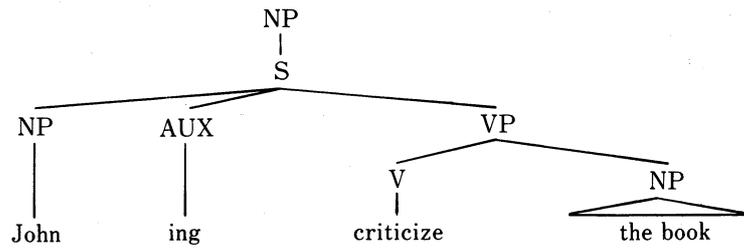
3. まとめ

以上の議論をまとめてみる。従来名詞句と考えられてきた構造は、実際には限定詞Dを主要部とする投射範疇であり、ゼロレベルの範疇と最大投射の生起する位置は区別されなければならない。限定詞句を仮定することによって、COMP, INFL, DETという3種類の非語彙範疇も語彙範疇と共に拡大Xバー理論の下に統一的に扱うことが可能となり、望ましい一般化が得られるようになる。

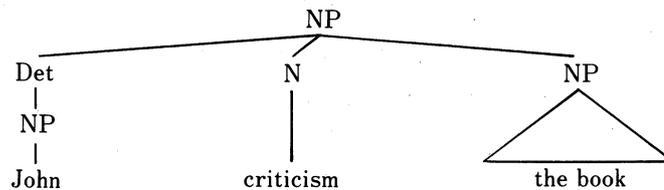
注

- 1) 本論文では名詞句という用語を使っていくが、後に明らかにしていくように、従来名詞句として捕えられていた構造は実際には限定詞句 (DP=Determiner Phrase) であると主張される。
- 2) Chomsky (1970: 200) 参照。但し、(2b)の樹形図はChomsky (1970) に示されたものではなく、Anderson (1983-84: 3) の(3a)を基にしたものである。
- 3) (4a, b)の基底構造については、それぞれ下記の(4c, d)ように考えられているものと思われる。

(4) c.



d.



4) (8)の構造は、Chomsky (1981) に実際に出てくるものとは少し異なっているが、この修正はここでの議論に影響を及ぼさない。

5) 詳しくは Chomsky (1985: 188) 参照。

6) Chomsky (1986: 4) の(4)参照。

7) 詳細については、Saito (1991: 121-22), Abney (1987: 101 ff.) および、そこに示されている参考文献を参照。

8) いわゆる名詞句と文構造の平行性に注目すると、(13)に示される文構造には機能範疇がCとIの2種類設定されており、まったく平行だとはいえなくなるように思われるかもしれない。

また、*this our wedding day* のような構造を限定詞句仮説の下でどのように扱うべきかという問題が残されているように見える。

これらの問題に関しては、ここでは触れないが、詳細については今井他 (1989) 参照。

参考文献

- Abney, S. (1986) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*. Doctoral dissertation. MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Anderson, M. (1979) *Noun Phrase Structure*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Anderson, M. (1983-84) "Prenominal Genitive NPs." *The Linguistic Review* 3, 1-24.
- Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," in R.A. Jacobs and P.S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, Ginn and Company, Waltham.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1985) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Fukui, N. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*. Doctoral dissertation. MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Fukui, N. and M. Speas (1985) "Specifiers and Projection." *MIT Working Papers in Linguistics* 8, 128-72.
- Giorgi, A. and G. Longobardi (1991) *The Syntax of Noun Phrases: Configuration, Parameters and Empty Categories*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 浜崎隆一郎 (孔一廊) (1987) 「何故「属格」だけが残ったのか?」『近代英語研究』4, 1-19.
- 濱崎孔一廊 (近刊) 「英語史における DP 構造の確立について」『近代英語の諸相』英潮社, 東京.
- 今井邦彦, 中島平三, 外池滋生, 福地肇, 足立公也 (1989) 『一步すすんだ英文法』大修館, 東京.
- Ritter, E. (1991) "Two Functional Categories in Noun Phrases: Evidence from Modern Hebrew," in S.D. Rothstein (ed.) *Syntax and Semantics* 25, Academic Press, New York.
- Saito, M. (1991) "DP and Wh-movement from a Noun Phrase," *Linguistics and Philology* 11, 119-33.
- Stockwell, R.P., P. Schachter and B. Partee (1973) *The Major Syntactic Structures of English*, Holt, Rine-

- hart and Winston, New York.
- Stowell, T. (1989) "Subjects, Specifiers, and X-bar Theory," in M.R. Baltin and A.S. Kroch (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Stowell, T. (1991) "Determiners in NP and DP," in K. Leffel and D. Bouchard (eds.) *Views on Phrase Structure*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Szabolcsi, A. (1983-84) "The Possessor That Ran Away from Home," *The Linguistic Review* 3, 89-102.
- Tremblay, M. (1991) "The Syntax of Possession," in K. Leffel and D. Bouchard (eds.) *Views on Phrase Structure*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.